

目的 織物のバイアス方向が被服構成に及ぼす影響は非常に大きい。そこで、バイアスの性能を把握し、できるだけくずれのない美しい仕立ての被服を製作し、かつ甚かや経験によって処理していた部分の数値化を目的に被服構成の主場からこの実験を始めた。

方法 試験布として左・右バイアス布の伸長特性が比較的差の小さいと思われる平織組織の織物5種類を選んだ。実験Ⅰ カーブの原型である円に対するバイアステープの適合度を求めるため、カーブの強い半径4cmの円の内側のバイアステープで始末する方法(見返し仕立て)として土台布の円周と同じ長さのバイアステープを縫いつけ、出来上り幅を測定し、それを基に希望の見返し幅にするためのバイアステープ長を算出する公式を求めることが出来た。実験Ⅱ 被服パターンの衿ぐり、袖ぐりの曲線に比較的多く用いられると思われる曲率半径の異った円を作り、その中から4種を選び前述の公式によるバイアステープ長で、それぞれの試料を作成した。実験Ⅲ 抽出した4種の円の玉繕仕立ての始末をする実験を行った。

結果 実験Ⅱでは実験Ⅰで得た公式に従って凹カーブの見返し仕立ての場合のいせこみ量(マイナス量も含む)の一覧表を作成した。実験Ⅲでは前述の見返し仕立ての数値を用いて玉繕仕立てに応用した結果曲率半径4cmを除き、その他は適応することが出来た。

以上の実験結果を踏まえて、曲線(凹・凸カーブ)を利用した実物製作を行った。おおよそ適合度のよい作品が出来上がった。